一八八三年九月二十三日（日）

南神村（ドッキネーショル）にて信者たちと共に

聖ラーマクリシュナは南神村（ドッキネーショル）の寺で信者たちと共に坐っていらっしゃる。ラカール、校長、ラーム、ハズラー等の信者たちが来ている。ハズラー氏は外のベランダに坐っている。今日は日曜日、キリスト暦一八八三年九月二十三日。バッドロ黒分七日。

ニティヤゴパール、ターラクたちはラームの家で生活している。ラーム氏はよく彼らの面倒を見てやっている。ラカールは時々、アダル・センの家に滞在している。ニティヤゴパールは四六時中、霊的恍惚状態にあった。ターラクも常に心を内に向け、人とあまり話をしようとしない。

〔聖ラーマクリシュナのナレンドラに対する気遣い〕

タクールはナレンドラの話をなさる。

聖ラーマクリシュナは一人の信者に向かって――

「ナレンドラは、お前のこともライクしない（＝好きではない。めずらしく英語の単語を使っておられる）。（こんどは校長に向かって）なあ、アダルの家にナレンドラはどうして来なかったのかなあ？

まったく、あのナレンドラの才能ときたら！　歌うも、弾くも、勉強も！　いつかキャプテンの馬車でここから行くとき、キャプテンは口を酸っぱくして自分の横に坐るように勧めていた。ナレンドラは反対側に坐った。キャプテンの方なんか目もくれなかったよ」

〔シャクティ派のガウリー・パンディットと聖ラーマクリシュナ〕

「ただ学問ばかりしていて、いったい何になる？　修行や祈りがなくっちゃ――。インデシュのガウリーは学者であり行者でもあった。シャクティ派の行者だ。大実母（マー）を想って、時々気狂いみたいになっていたよ！　時々、『ハレ、レ、レ、ニララランバ、ランボダル、ジャナイー、コン、ジャミ、シャラム？』と言っていた。そのときは、ほかの学者たちはミミズみたいに見えた。わたしも憑かれたようになってしまってね。わたしが物を食べる有様を見て、『あんた、女信者といっしょに修行したのか？』と、よく言ったものだ。

カルタバジャ派の人が、〝神は無形だ〟ということの説明をした。無形の神というのは、つまり水のようなものだって！　ガウリーはこれを聞いて、真っ赤になって怒った。

初めのころは、融通のきかないシャクティ信者だったよ。トゥルシーの葉を二本の棒でつまみ上げて触らないんだよ（一同大笑）。それからあと、家に帰ってきてからはそんなことはしなくなったが――。（訳注――トゥルシーの葉はヴィシュヌ派にとっては聖なるものなので、シャクティの狂信者は嫌う）

わたしはトゥルシーの木を一本、カーリー堂の前に植えておいた。でも、枯れちまったよ！　山羊（ヤギ）

の犠牲が行われる場所にトゥルシーの木は育たないと言うからねえ！

ガウリーは何でもよく説明したものだ。〝コレ、アレ！〟コレは弟子！　アレは君の守り神！　というふうにね。それからラーヴァナの十個の頭のことも言っていた。あれは十の感覚器官なんだと。クンバカルナはタマス性、ラーヴァナはラジャス性、ヴィビーシャナはサットヴァ性。だから、ヴィビーシャナはラーマをつかんだと」（訳註――ラーヴァナはラーマに亡ぼされたランカの王。他の二人、クンバカルナとヴィビーシャナは弟。ヴィビーシャナはラーマに従った）

〔ラーム、ターラク、ニティヤゴパールのこと〕

タクールは昼食後、すこし休んでおられる。その間にカルカッタからラーム、ターラクたちが来た。タクールにご挨拶してから、彼等は床に坐っていた。校長も床に坐っていた。ラームが、「私たちはコール（横太鼓）を習っております」と申し上げた。

聖ラーマクリシュナはラームにおっしゃる。

「ニティヤゴパールも何か楽器を習っているのかい？」

ラーム「いえ、彼はいくらか弾けることは弾けますが――」

聖ラーマクリシュナ「ターラクは？」

ラーム「彼は上手ですよ」

聖ラーマクリシュナ「それなら、うつむいて顔を下に向けることもないだろう。でも、一つことに

心を奪われていると、それだけ神様の方が留守になるよ」
ラーム「私がコールを習っているのは、称名讃歌（サンキールタン）のためです」
聖ラーマクリシュナ「（校長に向かって）お前は、歌を習ってるそうじゃないか？」
校長「はっはっはっは、とんでもございません。ただ、ウーンとかアーンとか声を出すだけで！」
聖ラーマクリシュナ「お前、あの歌を練習したことがあるかね？　知っていたら歌ってくれ、〝智慧も分別も要りませぬ、大実母（マー）よ、私を狂わせて〟
ほら、これこそわたしの気持ちそのままだよ」

〔ハズラーへの教訓――すべて愛せよ――憎しみ、悪口はやめよ〕
ハズラー氏はある人々に憎しみをもっていた。
聖ラーマクリシュナは、ラームはじめ信者一同に話される――
「郷里（くに）にいたころ、ある人の家に年中遊びに行っていた。同い年の友だちがいたからね。いつかもここに来て、二、三日泊まっていったよ。その人の母親がちょうどハズラーみたいに、いろんな人を憎んでいた。終（しま）いに、その母親の足がどうしたはずみか、脱臼してしまった。そして足が腐ってきた。その臭いがひどくて、誰も母親の部屋には入れなくなった。
ハズラーにこの話をして、『あんまり人の悪口を言うな』と言っておいたよ」
午後四時ころになって、タクールはお顔や手を洗われるために松林（ジャウタラ）にいらっしゃった。タクールの

部屋の東南のベランダには敷物が敷かれている。タクールは松林(ジャウタラ)からお帰りになると、その場所にお坐りになった。ラームたちがいた。アダル・センは金商人である。ラームがアダルの家でのラカールの食事について、何やら小言を言っていた。アダルは熱心な信者である。

一人の信者が、金商人仲間の話を面白おかしく描写して聞かせていた。タクールは笑っていらっしゃる。それによると彼等は、ルティ(チャパティ)を食べるときはサブジ(野菜の炒め煮)といっしょに食べるのが好きならしいが、なくても気にしない。また彼等は、飛びっ切り上等の米を常食とし、間食には必ず何か果物を添えなければ気が済まない。そして、アムラ(スモモ)が大好きで——等々。もし家にヒルサ魚とかサンデシュなどの到来物があると——その到来物はそこの親戚の家に行くことになる。その親戚はまた自分の親戚の家に届ける。結果として、一匹のヒルサ魚は十五軒か二十軒の家々をめぐることになる。婦人たちは家事一般はするけれども、何か料理をこしらえる場合は、わざわざオリッサ州出身のバラモン料理人を呼ぶ。A家には一時に、B家には二時に、という具合にたのむ。だから、一人のオリッサ出身の料理人は一日に、四、五軒の料理をして歩くことになる。

聖ラーマクリシュナはお笑いになっただけで、何もおっしゃらなかった。

〔タクールの三昧——宇宙の母との対話〕

夕方、聖ラーマクリシュナは中庭の北西隅でお立ちになったまま三昧に入っておられる。随分経ってからやっと、肉体感覚が戻ってきた。何という驚くべきタクールの境地！　近頃はほとんど三昧に

入っていらっしゃる。ほんの少しの刺激で外部の意識を失われるのである。信者たちが来たとき少し話をなさるだけで、そのほかのときは、常に心を内に向けておられるのだ。礼拝や称名などのことも、よくお出来にならぬようである。

〔聖ラーマクリシュナの行事脱落の境地〕

三昧が解けると、お立ちになったそのままで宇宙の大実母と対話しておられる。「マー！　祈りも去った、称名も去った。（原典註1）よく見ててくれよ、マー、でくの坊（ぼう）にならないように！　召使いの気分を残しておいてくれ。マー、話が出来るように。あんたの名前が言えるように。あんたの称名讃歌ができるように。歌がうたえるように。マー！　それから体にも少し力をつけておくれよ、マー！　自分で少し動きまわれるように。あんたのことが話せるところに、あんたの信者たちがいるところに、そういうところに行けるように――。ね、いいだろ？」

今日の朝方、タクールはカーリー堂に行かれて、大実母の聖なる御足に花を供えて来られた。――タクールは再び大実母と話をお続けになる。

聖ラーマクリシュナ「大実母（マー）、今朝あんたの足に花を二つ供えた。いい具合だ、また礼拝の方に心

（原典註1）だが　自己の本性（アートマン）を知って　それに満足し　歓喜し
それに安んじ　楽しむ者には　もはや為すべき義務（しごと）はない　――ギーター３－17――

が戻っている、と思ったよ！　それなのにマー、こんなふうになるとは、どうしたわけ？　また、どうしてでくの坊みたいにしてしまうんだい！」

バッドロ月の黒分七日。まだ月は昇らない。暗い夜である。聖ラーマクリシュナはまだ半三昧状態のまま、自室の小寝台にお坐りになった。そして再び宇宙の大実母と話をなさっている。

〈イシャンへの教え――現代はヴェーダに書いてあるようにはいかない――神を母と見なして修行せよ〉

こんどは、信者たちのことを大実母に話していらっしゃるらしい。イシャン・ムコパッダエのことを言っておられる。イシャンはバトパラへ行って、ガーヤトリーのプラスチャラナ（ヴェーダのなかの聖句を真言として称える特別修行）をすると言っていた。聖ラーマクリシュナは彼にこう言い聞かせておられた――現代は、ヴェーダの時代のような修行方法は出来ない。衆生は食物に依存した生活で寿命も短いし、肉体意識をすっかり無くしてしまうことは到底できないのだ。だから密教式に、神を母と見なして拝むように――。ブラフマンである御方が大実母、つまり、根元造化力なのだ、と。

タクールは半三昧状態で話しておられる――

「今さらガーヤトリーの特別修行！　こっちの屋根からあっちの屋根にとび移る！　……いったい誰があれにあんなことをしろと言ったんだろう？　自分でそう思ったのか！　まあいいさ、少しは特別修行をしても――」

そして校長に向かい、

「お前、わたしのこの有様はみんな、ホントなのかな？　それともタワゴトなのかな？」

校長は、タクール、聖ラーマクリシュナが宇宙の大実母とこんなふうに話をしていらっしゃるのを拝見していたのであった。驚きのあまり、口もきけないほどなのである。神は我々のすぐ近くに在（おわ）す――外にも内にも。すぐ近くでなかったら、聖ラーマクリシュナがあんなふうに、ヒソヒソとその御方と対話をなさる筈がない。（原典註２）

（原典註２）眼で広大な空を見るように、賢者は至高なるヴィシュヌの住居（すまい）を常に見る。

――リグ・ヴェーダ・本集（サンヒター）１-23-20――